

1994年、日・中・韓・露の演劇を学ぶ学生たちが演劇を通じて交流する「ひまわり」アジア太平洋青少年演劇祭(兵庫県主催)の制作を担い、スクールの違う制作現場で「ひまわり」をたぎらされた翌年、あの未曽有の阪神・淡路大震災に遭い、「音楽や演劇、美術などの芸術文化活動は単に心を豊かにするだけではない、心を大きく傷を負った人々の心を癒やし、再び前を向いて生きていく意欲をも抱かせなければならぬ」とを身体感した。

震災を経て、兵庫県は2004年に「芸術文化振興シヨム」を策定。その後、少子高齢化も情報化の進展のほか、芸術を取り巻く

舞台芸術プロデューサー

森村 暁子

“場”を生かす人材育成を

諸情勢を鑑みて、15年3月に改訂した。その中核に兵庫県立芸術文化センターがある。同センターは1988年に基本構想が始まり、兵庫県現代芸術劇場(芸術監督・山崎正和氏、西宮市在住)を経て、震災で建築計画が一時中断したが、2005年に開館。現在、「生

きる力」を培う「場」として、日々多くの人が訪れている。また、06年に教育基本法が改正され「我が国の伝統と文化を基盤として国際社会に生きる日本人の育成」が明記された。文化庁も伝統文化を体験・習得する親子教室を02年から開いている。近年は東

見る 思う



もひむろ・あきこ 1975年西宮市生まれ。関西舞芸芸術研究所代表。武庫川女子短大英文科等、仕事の傍ら神戸親和女子大経営教育学部卒。同大学院文学研究科教育学専攻修了。西宮文化協会理事、和文教育学会理事。

京オリンピック開催決定により、自国への文化アイデンティティを培うために和文教育に拍車がかかる。教科書には伝統と文化に関わる内容の掲載が年々増加。各行政も伝統芸能の公演に力を入れ始めたため、企画・プロデュースに携わる機会が増えてきている。そのたび、芸術文化活動について思考する。おのずとよみがえる

のは震災での実体験であり、生の制作現場だ。「何のために、どのような「場」へ行って、どのような「心」を育むか。企画の段階でいつも試行錯誤する。「場」を生かす芸術文化活動を十分吟味しなければ、あちこちで見る巡回公演にすぎない。もちろん素晴らしい舞台であれば心を揺さぶられる感動はあるだろうが、地域活性化としての「場」の意味がない。その地に住む人々が自ら文化を育み、文化アイデンティティを培っていかける企画・プロデュースが望ましい。人が集い、人が感動し、

人が文化を生み出していく。そのような「場」への行方こそ、地に着いた「心」を育むための舞台となるのではないだろうか。

「未来を担う子どもたちのために、どのような芸術文化活動が望ましいか」を考える市民アロユース1の人材育成に未来が見える。人を取り巻く環境に芸術文化があり、人間形成上その影響は大きいと捉まえ、「自分アロユース」の必要性も提唱したい。

自身の住む地に蓄積されてきた「文化」を掘り起こして、次世代を担う子どもたちに引き継ぐ。市民自らが活躍できる人材育成事業に力を入れていくべきだ。